



中村俊定文庫
文庫 18
266



花守

月を吹あくる
花よりまじりて
舟乃きこゆる
友情の逢ふて
を結ひまりし
不負

おん一曲は吟し
流る世々集守り
るりり

一月樓里は月虫



酒にて流る花は雪吹か
すし水か馬乃鼻息
孤危の春よふ字に果もれ
菊ひさき進ハ函辞さぬ
かんたんハ風の音何るえん
追り水を鶴に宛花一落

里先
紀聲
紀逸
先
考
逸



三日月の入りはあけぬ身
くつこやういふは
秋の虫大うさぎ
引きくまのありけ計
川舟のうさぎ
つきは寝る枕
灯乃消る前
神み月れ

聲 先 送 聲 先 逸 有 乞

空病の一丸
夕汐れき
振るる
月代の世上
日とく
無めけて
たさ

先 送 聲 先 送 聲 先 逸

放^{ニラ}き瑞^{ニラ}を^行行て^行ぬり^行あつり
 喚^ミきけり^ミと^ミ聖^ミと^ミ捨^ミ殿
 物思^ミひ^ミよ^ミいと^ミふ^ミよ^ミ恋^ミり^ミ身
 ゆり^ミ起^ミて^ミれ^ミて^ミ夢^ミれ^ミあ^ミふ
 血^ミ砂^ミ流^ミひ^ミき^ミれ^ミ灘^ミを^ミ是^ミて^ミ二^ミ度^ミ
 と^ミあ^ミ毒^ミハ^ミ人^ミに^ミ知^ミる^ミ丸^ミ葉^ミ
 珠^ミ粒^ミ挽^ミハ^ミ奈^ミ亦^ミの^ミ後^ミ生^ミを^ミ紫^ミと^ミあ
 帝^ミ盤^ミ木^ミ代^ミ美^ミの^ミ落^ミる^ミ日^ミ中^ミ

逸^ミ之^ミ聲^ミ逸^ミ之^ミ聲^ミ逸^ミ之^ミ聲^ミ逸^ミ之^ミ聲^ミ逸^ミ之^ミ聲^ミ

立て^ミ突^ミく^ミと^ミに^ミて^ミ何^ミる^ミ心^ミ太^ミ
 乳^ミ母^ミの^ミ言^ミ語^ミ乃^ミ捨^ミ殿^ミの^ミ延^ミ
 辛^ミ都^ミ學^ミも^ミ一^ミつ^ミけ^ミと^ミ死^ミ故^ミ所^ミ
 草^ミれ^ミい^ミや^ミい^ミ美^ミの^ミ終^ミ既^ミあり^ミ
 名^ミ月^ミの^ミ捨^ミひ^ミ跡^ミ後^ミ乃^ミ月^ミ
 宿^ミぬ^ミ顔^ミを^ミて^ミ病^ミる^ミ麻^ミ吟^ミ
 晒^ミ印^ミこ^ミう^ミ也^ミと^ミあ^ミれ^ミ至^ミと^ミこ^ミろ
 高^ミ孤^ミ色^ミを^ミん^ミゆ^ミれ^ミく^ミて

逸^ミ之^ミ聲^ミ逸^ミ之^ミ聲^ミ逸^ミ之^ミ聲^ミ逸^ミ之^ミ聲^ミ逸^ミ之^ミ聲^ミ

磨石膝をさしけり行末を記
まゝ黒髪はあめり地子
かきす物引と箱を追為し
空をく志人と陽村小谷
風を熱くしれ夢忠 猿 細子
襦を握りておれ 油子
曲を教ふと不事と反かたり
隣れをいれりて了る 菅垣

邊 考 邊 聲 邊 聲 邊 聲

草鞋くけ長途偏より不さまり
言も何んか 淫樂會此月
初てし如家花れ吐のし野山
静に蛇乃歩り 依 志
三
日時計の心見の節かたり
去けく指の包ふ常香
よあれ 畏くしと所り 明子
半路ハ 船を 跡る とい 圓

見 邊 聲 邊 考 邊 聲 邊 聲

ころくと風は青白れ吹ちれ
 都一朝日の如くも暑振
 さりてく遠慮の火鉢燃えさる
 比はてしなく命海乃比
 あふきれ竹ののたれ疎あり
 何うぬさるゝんされ衣く
 石葛と鈴の音もとかうく
 並て 並て 素湯と粉葉
 先 造 考 先 造 聲 先 造

蝕乃月周と月有れ了此物
 柳ハ横く包む夕秀
 追風子好天のけらけら
 浪を遠く答此約束
 くれくと早合点乃神入
 隣れ家一分秋散柱
 梅漬(き)ゆり人を手と活し
 昼と何くぬ枕つせり記
 先 造 考 先 造 考 先 造 考 先 造 考

喜山に遊ばせしれり長安寺
刈田のありし水邊ふ新
晴蛉のとまりて羽を展
風之志竿弦心し、弦
音物危鼓鼓れ由り、漆
立こそ水袖くく記書添
花もに去るひ上ヶ法、砂水
是ニツ三ツ、まひりれ音

先 逸 考 先 逸 考 先 逸 考 先

ナラ
ここのまゝハ根ニ留りそ水つ切
外すありハ京町の河原
ある時ハ腕筋とよぶを志して
情いとたよぬを四五月
笈摺の執執く回を挿しあり
舟にを沈みさうなち船
標抗横ニ、舊れ現さ
おとけのありしを降し

先 逸 考 先 逸 考 先 逸 考 先

物いひを四角四面ふ草履丸
 細のろか 鐸此象眼
 一繩こよ過一のよき 斬草
 一海くえへぬ水了物湯
 男山かーはる 薄月夜
 石こはらりのはよみ 稀雲
 葛^{ナラ}此禁のさもふい時を裏か了
 螺髪を三ツ四ツ了了 草繩
 聲 逸 先 逸 聲 先 逸 聲

及打て 拵る 匠者れ ちふれて
 中か 天か 下よ 垂く ち
 衣影 波よ ち 拵 搦大工
 夕日 多し ち 日 和 學 拵
 花の 箱 暇を して 又 中 ち
 柳ハ ち ち ち ち ち ち
 執 筆 逸 先 聲 逸 先

天と人の酔やうむ華はくり
 氣は垂る夜の曲や花の山
 穉けよの雨も降りふ花志比
 蝶この志やけ〜花の山
 月の夜は空を〜是〜苦之外
 去所（早）り車さきり花車
 後けよのもてふ〜外〜花車
 而夕 霞山 蕉雨 若之 来松 里松 豫出

乞食と十日何ろ〜花の山
 心ある馬の眠りや花の陰
 一何ろり様も純利もはく〜外
 吹さむ〜雲の〜去くや花の山
 仙法のね〜もめ〜花の山
 友あくて異形〜症症まり山様
 眼指をさす女あり花の山
 今の世と動は流ふぬはく〜外
 里雪 文瑞 素約 紀海 杵狄 吐絲 川舟 陸琳

古寺の芭蕉の涙一花はり
 立装の男を^たりて花の山
 おおの花をたと^れん親の供
 手くの酒をためや花はり
 移る香にお職のぬきめ花の山
 以る花をれして^れ花を^れり
 登る花を花の明方夕くれ
 目下^く遠く^める^遠一花の山
 霞朝

待つて笑せるとてり山さく
 なく山に隣も^りや花はり
 咲色はく^りも^り花はり
 夕涼の日記より^り花はり
 蝶々を口吸れきり^り花はり
 花の香清く^り花はり
 年々^り花はり
 女
 壽山
 素琴
 鯉洲
 素甫
 玉汁
 不道
 扇阿
 湖十

切米此今年ハ花久小袖川な 存茶

上野より帰るて狭道の糸原心よきれ

履之くゆきもよりや花の陰 渭北

花傳も下戸も香氣そ花の山 富旭

草却^臥そこの物此多も枯くそ 菅子

花の香やけこり花影の比丘尼達 故一

船路と河をよれし 花く^程 葵月

大りこの髪弦水^程そ花く^程 水語

毛纏と平日一扱花の山 田社

名の知れぬ物給ひきり花盛 飛文

花中より扇も志れく 花の山 茶外

たく山もき^しるま^いあ^のあ^まる^水 金^る

き^ー掃の^いよと^おそ^や屯^の流 出ん^き

外の^あま^り骨^筋お^まる^はく^くく^く 造^様

全輪され什物とんき

氏屯の屏風や花の後^は楯 橋川

高人の口よりせりしを日如
 喉中の一重はくは此手柄り
 帯あてし情ふは不河伝え様
 引てり^行禮のほくさよ花はくり
 下寺や下舟を通る花の言
 夕くれやきさ合せて花の言
 祇臣
 允曉
 牛子
 許人
 紀孝
 紀逸

一月橋主人 世居る身代
 月のおむさし 燈はもし衛何る
 乃花は夕まを 教るをいふ
 流るるあ乃 婦と詠し
 白くたれり 古くを歌えん

とむきはく人あふ佳句を
おろす梓工ちりこ免一凡雅
かきりあきを かくしてそいふ
玉の尻とも ねえ菴 記考改

寛保ニ壬戌春

彫工吉田真川

